

台湾雑記

北村 稔

昨年（一九九一年）の十二月二十日から十日間にわたり台湾を訪れた。二年ぶりの訪問である。以下、十日間の滞在中に見聞したことや折にふれて考えたことを羅列してみた。読者の台湾理解の些かの御役にたてば、幸いである。

時あたかも国民大会の代議員を選出する四十四年ぶりの選挙戦の真最中であり、国民党と民進党が、しのぎを削る戦いをくりひろげていた（民進党は一九八六年に成立した野党であり、反国民党を党是とする。正式名称は民主進歩党）。

国民大会は中華民國の総統と副総統を選出し、憲法を改正する権限をもつ。第一回の代議員選挙は、国民党が中国大陸にいた一九四七年の十二月におこなわれていた。

四四年ぶりの今回の選挙にあたり、民進党は新憲法を制定し、現行の総統の間接選挙を、台湾住民による直接選挙に改めることを主張していた。これにより、中国大陸からは独立した、台湾共和国建設の第一歩を踏みだそうというのである。

民進党は一九九一年十月の第五次全国代表大会において、新憲法制定と台湾共和国の建設を提起し、その是非を選挙を通じて台湾住民に決定させるという決議を行った。目下のところ、台湾独立のための直接行動は、刑法百条により内乱罪として取締られる。独立を提起するが、その是非は住民の決定にゆだねるという民進党の決議は、内乱罪の適用を避けるためである。

民進党の提起する台湾独立は、台湾における国民党政権の存在理由（中国流にいうと、権力の合法性あるいは正統性である）を否定する狙いをもつ。

かつて国民党が中華民國の名のもとに中国大陸を支配し、そのご共産党との内戦に破れて台湾に移ってきたことは、説明するまでもない。そのご国民党は、自分たちは中国大陸に対して支配権を保有し、その回復のため一時的に台湾に拠っているのだという名分により、台湾住民に対して強力な支配権を行使してきたし、現在なおもこれを行使しているといえる。

中国大陸と台湾が政治的に切りはなされてしまえば、国民党が台湾で強力な政治支

配権を行使する名分は失われる。主客転倒し、国民党は台湾住民のお荷物でしかなくなってしまう。いまは亡き蔣経国（蒋介石の長男。一九二五年から三七年までロシアにとどまった。夫人はロシア人）が、民進党の成立を容認しつつも、条件として、中華民国憲法の遵守と台湾独立を唱えぬことを求めた背景には、このような政治的理由が存在する。

民進党による台湾独立の提起は、チベットや新疆ウイグル自治区など、国内に民族独立問題をかかえる中国共産党にとっても、容認できぬことである。民進党が台湾独立を提起するや、鄧小平・楊尚昆・李鵬らの中国共産党要人たちはあいついで発言し、武力行使までのめかす威嚇をくわえた。

一方、国民党も、中共の武力行使をまねきかねないことを最大の理由に、台湾独立論を危険な冒険主義であるとして葬り去ろうとした。そして台湾と中国大陸は、将来的には平和裡に統一されるべきであり、現在の台湾の経済的繁栄を維持しようと、マスメディア（テレビは国民党の独占）を通じて住民に訴えた。ちなみに台湾の一人あたりのGNPは、一九九一年度は九千ドルに近づいている。一九九二年度には一万ドルを越えるという予測もある。日本が一万ドルを越えたのは、一九八〇年であった。

台湾独立論を敵視する点では、国民党と共産党の立場は、軌を一にしている。

筆者の手もとに、民進党の選挙戦のポスターがある。国民党と共産党の両方に対し、「台湾を恫喝しないでくれ」〔請勿恫嚇台湾〕と訴えるものであり、この間の事情をよく物語る。

はたして十二月二十一日の投票の結果、民進党の得票率は二五%弱であった。台湾独立論は、現状維持による安定を志向する住民からは、金面的な賛同を得ることはできなかった。しかし台湾独立論は、今後とも種々の選挙戦における国民党と民進党の争点となりつづけるであろう。

筆者が台湾を訪れたのは、国民大会代議員の選挙見物が目的ではない。

十二月二十六日から二十八日の午前中まで、台北の中央研究院で開催された「孫逸仙〔孫文。逸仙は号〕思想与国家建設国際学術研討会」に参加することであり、さらには十二月二十八日の午後から二九日の午後まで台湾大学で開催された「二二八学術研討会」〔二二八事件については後述する〕に参加することであった。前者の研討会〔研究会〕は、台湾師範大学三民主義研究所の主催であり、要するに国民党主催の会議である。後者は、二二八民間研究小組・台美文化交流基金・現代学術研究基金会の共催であるが、実質的には民進党主催の会議であるといつてよい。

二つの会議にあいついで出席したことは、筆者には極めて有意義であった。これにより、国民党と民進党という現在の台湾で対抗している二大勢力のいずれの側にも身近に接し、台湾社会の権力構造の一断面を、具体的な人間および人間と人間の関係を通じて考察する機会を得た。

このようなまたとない機会を筆者に提供したのは、立命館大学大学院博士課程（東洋史専攻）の黄英哲氏である。黄英哲氏は民進党の熱烈な支持者であり、かつては政治運動にもたずさわったらしい。しかし現在は、学生生活を旨として本学で勉学にいそんでいる。

黄英哲氏は、自らも報告を行う二二八学術研討会への参加を強く勧めてくれただけでなく、なんと国民党主催の孫逸仙思想与国家建設国際学術研討会への参加の、御膳だてまでしてくれた。この話は、黄英哲氏の中学・高校を通じての親友で、大学で政治学を講じている人物（国民党員である!!）を通じてもたらされた。参加者には渡航費・宿泊費（食事付き）論文発表費用（!!!）が提供されるという。

二二八学術研討会に自費で参加するという悲壮な覚悟をしていた筆者を、黄英哲氏は少なからず憐れんでいたに違いない。台湾訪問の財源をもたらず一挙兩得の便法として、国民党主催の会議への参加を、筆者に強くすすめた。

財源獲得の魅力もさることながら（当初は、これにのみ激しく心を動かされていたことを告白しておく）、国民党と民進党の両勢力に一挙に接近できるという期待から、筆者は二つ返事で孫逸仙思想与国家建設国際学術研討会への参加を承諾し、発表する研究報告の原稿を必死でつくりあげ、立命館大学博士課程（東洋史専攻）の馬燕女士に中国語に翻訳してもらったあと、ファックスで師範大学の三民主義研究所に送り、おいそがしで大阪空港を台北にむけて飛びたった。

台北には十二月二十日昼についた。一足さきに帰国していた黄英哲氏が、空港まで出迎えてくれた。

空港からバスに乗り、師範大学の宿泊施設に行き、部屋をみる。師範大学は中等教育にたずさわる教員の養成を主たる目的とする大学である。文教政策の要に位置し、文部省に相当する教育部とのつながりが大変につよい。学長や学部長を務めた人物は、おおむね教育部の高官に就任するという。校舎は日本統治時代の台北高等学校の建物をひきついだ（黄英哲氏談）。

師範大学の宿泊施設は町なかに位置し、交通の便がよい。しかし建物は些か老朽の感を呈している。黄英哲氏が選択肢として別に予約しておいてくれた中央研究院学術活動中心〔センター〕に宿泊することにする。町なかへの交通の便はあまりよくない

が、二十六日からの孫逸仙思想与国家建設国際學術研討会はこの建物の中で行われ、その点では甚だ都合がよかった。(結局、黄英哲氏とツインの部屋を共有し、十日間、同所に滞在した)。

このあと手塚山大学の伊原吉之助教授ならびに黄英哲氏と、選挙運動の様子をみにでかけた。伊原教授は師範大学の宿泊施設に十二月十五日より滞在し、国民大会の選挙の動向を調査していた。

黄英哲氏の案内で民進党の本部をおとずれ、おりから行われていた記者会見をみる。民進党のスポークスマンも新聞記者たちも、若いのにおどろく。みな三十歳台の前半であろうと思われる。

さらに黄英哲氏の案内で民進党の候補者たちの事務所をおとづれ、伊原氏がいろいろ質問する。人があわただしく出入りし、電話のベルが鳴りひびいている。候補者のうちの一人は、日本語が流暢であった。残念なことに、これらの候補者たちは、みな落選した。

このあと伊原氏とわかれ、黄英哲氏とともに、二二八學術研討会の召集人の一人である、台湾大学の鄭欽仁教授を大学の宿舎にたずねる。鄭教授は五十過ぎの人物で、中国古代史の研究者である。日本の東京大学に留学して博士号を取得し、日本語に堪能である。黄英哲氏によれば、鄭一族は台湾省新竹県の名家で、清朝時代に進士を出したという。

鄭欽仁氏は、いかにも学者然とした物静かな人物である。しかし台湾に生れ育った本省人として、国民党支配を台湾住民に対する外来の抑圧であると考え、その不正を糾すことを自らの使命とみなしている外柔内剛の人物である。

ちなみに現在の台湾の人口は約二千万人。このうち二百万人ほどが一九四五年以降に(とくに一九四九年以降に)国民党とともに中国大陆から移ってきた人々であり、土着の本省人に対して外省人とよばれる。

鄭欽仁氏は民進党のプレーンの代表の一人であるが、民進党には加入していないという。

鄭欽仁氏からは二時間以上にわたり、日本語による熱心なお話をうかがった。台湾における民進党出現の背景や、二二八事件の意味など、はじめて筆者の中に、実感を伴ったイメージが浮びあがった。お話をうかがっている最中に、鄭欽仁氏の教え子であった数人の若者が、一人また一人と座に加った。このあと午後六時頃から場所を移し、町なかのレストランで黄英哲氏も交えて、鄭欽仁氏から御馳走になった。

明けて二十一日は、国民大会選挙の投票日である。朝から雨。雨だと人の出が悪

く、民進党に不利だという。黄英哲氏が心もとなげな顔をしていた。

午後から黄英哲氏の案内で、中央研究院の構内にある近代史研究所をおとづれる。黄英哲氏はかつて近代史研究所の助手をつとめ、知人が多い。中国共産党史の研究者である陳永發氏、および学生運動を中心に五四運動（一九一九年に発生した反日運動）時期の思想史を研究している呂芳上氏をたずね、意見を交換する。陳永發氏はスタンフォード大学に留学した四十歳台後半の気さくな人物である。呂芳上氏は国民党員であり、かつては国民党党史史料編纂委員会に勤務していたという。黄英哲氏によれば、同委員会の雰囲気になじまず、近代史研究所に移ってきたのだという。誠実な人柄で、筆者とは同年齢らしい（四十三歳）こともあり、すっかり意気投合した。

二人の研究者との対話では、「政治」に気がねする必要のない有意義な話しあいできた。共産党史は勿論、国民党史の研究においても、何らの研究上の制約のないことがよくわかった。

民進党という反対勢力の存在が承認され、支配政党である国民党との間で選挙がたたかわれるという今日の台湾には、すでに学問の自由が大幅に存在している。

国民党嫌いであり民進党の熱心な支持者である黄英哲氏が、いずれは台湾に帰って研究職に就くつもりだと述べる背景がよくわかった。

中国大陸では、こうはいくまい。

今後、台湾との学術交流を積極的に進めていく必要がある。台湾の研究者たちも交流をのぞんでいるのがよくわかる。

二十二日は黄英哲氏と街に出て、本屋をたずねた。店の主人が、「一人で上海まで仕入れにいった」と日本語で語りかけた古書店で、仕入れたばかりの共産党史関係の新刊本を二冊買う。「値だんは日本で買うのと同じくらいだ」としきりにいうので、ひやかし賃と思い購入した。台湾から中国大陸への渡航は、一九八九年以降自由化されている。

二十三日から二十五日までは、二十六日から連続で四日間つづく二つの会議にそなえ、英気を養った。

台北郊外の淡水に、かつての英国領事館の建物をたずねた。さらに黄英哲氏の親友の岳父が所有する北投温泉の別荘に、一泊して内湯につかった。一夜あけて日本の五月の陽気の中を、徒歩二時間半で陽明山に登った。十二月の末にこんなに暖かいのなら、年をとったら台湾に避寒にこようかなと、本気で考えた。

十二月二十六日の午前九時半から十時半まで、中央研究院学術活動中心の一階大講

堂において、孫逸仙思想与国家建設国際学術研討会の開会式が行われた。当初は、開会式では中華民国総統であり国民党中央執行委員会主席でもある李登輝が、演説を行う予定であった。国民党側がこの会議を重視していたことがわからう。結局は李登輝演説は実現せず、会議の主催者である師範大学三民主義研究所々長の趙玲玲（女性）が、印刷され配布されていた李登輝の演説稿を代読した。

趙玲玲女史は五十歳位の言語明晰・挙措周到な人物で、大変なやり手とみうけられた。黄英哲氏によれば、趙女史は外省人であり、夫君も外省人の將軍で、現在、行政院長を努める郝柏村（外省人の軍人。前国防部長。外省人勢力の代表とみなされる）の右腕だという。ところが本稿に何度も登場している黄英哲氏の親友で、筆者がこの会議に出席するきっかけとなった国民党員の大学教員は、本省人ではあるが、やがて趙玲玲の側近の一人になるだろうという（黄英哲氏談）。

ここにみるように、今日の台湾社会は、国民党（外省人）と本省人の対立という単純な国式では、もはや理解できない。

国民党は台湾に来て以来、四五年を経て台湾化しつつある。すでにその党員の八割は本省人である。本省人の国民党員と、党の中枢を握る外省人の国民党員とのあいだには、対立関係もあるという。本省人の李登輝（京都大学、台湾大学、コーネル大学で農業経済学を専攻した学者である）が、一九八八年に国民党主席に就任したのは、この対立にバランスをもたらすためとも考えられている。

今回の国民大会の選挙で国民党は七割の得票率をほこり、民進党に大勝した。しかし国民党の当選者の中に外省人が多すぎるため、国民党内の本省人の反撥が出現するだろうという民進党側の観測もある。

さらにまた、本省人の中にも多数派（八割を占める）の福建系と、少数派の広東系（客家）の対立が存在し、状況を複雑にしている。

外省人、福建系の本省人、広東系の本省人という三大グループは、台湾の政治のダイナミズムを構成する基本要素ではある。しかしこれらのグループの間には、学校教育などを通じての多くの友人関係や師弟関係が存在しており、単純なグループわけによる理解を困難にしている。

要するに今日の台湾社会は、急速な経済発展にともなう中産階級の大量出現により、価値の多様化が進行しつつある。そしてこの多様化が、グループの差異だけを理由とする利害対立の激化を防止し、根づいてきた法治主義を基礎に、台湾の安定的変革を可能にしているといえよう。

国民党にいわせれば、以上のような経済発展と政治の相対的安定をもたらしたの

は、自分たちの統治の成果であるということになる。

国民党は昨今、「台湾経験」という言葉で、自分たちの成果を自讃する。この台湾経験という言葉からは、この経験は中国大陸にも適用できるのだぞという自負がうかがえる。そしてこの台湾経験をもたらした原動力こそが、国民党の創始者である孫逸仙〔孫文〕の三民主義思想であるということになる。

孫文が、民族主義、民権主義、民生主義を柱とする三民主義を提唱したことは、よく知られている。その膨大な著述は、台湾では『国父全集』として刊行されている（中国大陸でも『孫中山選集』として刊行されている。中山は逸仙と同じく、孫文の号）。

孫逸仙思想与国家建設国際学術研討会の開会式で、李登輝にかわり壇上に立った副総統である李元簇は、台湾経験を力説し、この経験の基礎にある三民主義思想は各国の国家建設の基本になりうるものであり、大いに三民主義思想を世界におしひろめようと演説した。

かつて中国大陸を吹きあれた文化大革命の最中に、毛沢東思想が革命思想として世界各国に輸出されたことはよく知られている。

筆者は、国民党も共産党の向うをはるつもりかと思い、皮肉な気持ちで李元簇の演説にききいていた。

開会式がおわると、二〇分の休憩のあと三つの分科会にわかれて、二十七日の午後までつづく孫逸仙思想与国家建設国際学術研討会が開始された。

分科会には、憲政組〔憲法政治〕、人文組〔歴史・哲学・思想〕、経済福祉組〔経済・社会福祉〕があり、それぞれ七回の研究会を行った。研究会一回あたりの時間は一時間半、二人の報告者が各自のテーマで報告し、そのあと質疑応答が行われた。三つの分科会をあわせての出席者は、三百名近くあった。

筆者は人文組に参加し、二十七日の午前中に、「孫逸仙与農民問題——耕者有其田思想在中国近現代史上の意義」というテーマで二〇分ほど報告した。中国語のテーマを日本語になおすと、「孫逸仙と農民問題——耕す者は其の田を有す思想の中国近現代史上における意味」である。

「雑記」という本稿の性格上、筆者が行った研究報告の詳しい内容は割愛させていただく。この報告は、主催者側が出版する『論文集』に収録される。要するに筆者が主張したのは、孫文が一貫して保持した階級闘争を否定する態度は、決して彼の革命が不徹底であったことを意味せず、反対にこのような態度は、当時であっても現代であっても、合理性を備えた建国計画の基礎をなしているのだ、ということである。

研究会は順調に進行し、二日めの午前中には総括会議と閉会式が行われた。

今回の会議には欧米からも研究者を招待したというが、クリスマス休暇で参加者はなく、海外からは、香港三名、日本一名、ロシア一名にとどまった。あえて年末のこの時期を選んだのは、現行の中華民国憲法が成立した日である十二月二十五日（一九四六年）を意識してのことであるときいた。

閉会式では海外からの希少な参加者として、筆者ならびにロシアから来たアカデミー哲学研究所主任研究員であるプロフ氏が壇上にのぼり、あいさつをさせられた。

筆者は再三の固辞も空しく、「招待していただいて光栄に思います。中華民国と日本の学術交流のさらなる発展を希望します」とだけ述べた。

プロフ氏は、出国のさいに手間どり研究会には間にあわなかったこともあり、閉会式のあいさつをかりて、二〇分ばかり所説を展開した。プロフ氏は、孫文が一九二四年七月の民生主義講演において述べた一節を引用した。すなわち、「マルクスのいう階級闘争は病理学者の言であり、原因と結果を逆さまにしている。自分は階級闘争が発生しないように社会を導いていく生理学者である」という、知る人ぞ知る一節である。そしてプロフ氏は、今やこのような孫文の立場の正しさは、歴史的に証明されたと述べたのである。何と、筆者の観点と大同小異ではないか！

筆者は、「永生きすると面白いものがみられるな」と思いながら、中国語を駆使するプロフ氏の横顔をながめていた。マルクス主義の階級闘争史観にもとづき、常に不徹底な革命であると自らを批判しつづけたロシア人たちの子孫が、すでにソ連共産党が解体したとはいえ、七〇年後には自分の正しさを顕彰してくれるなどと、孫文は夢想したであろうか。しかも遠い台湾の地においてである。

このほか閉会式では、とび入りの形で孫文の孫の孫治平氏があいさつに立ち、とつとつとした口調で三民主義の今日的意義を語った。孫治平氏は六十歳ぐらいの人物であるが、会場の前列にすわっていたやはり六十歳ぐらいの国民党員たちが、「なるほど孫科〔孫文の長子〕にそっくりだ」と語りあっているのが耳にはいり（たしかに写真で知っている孫科によく似ていた）、孫文—孫科—孫治平のつながりに思いを馳せていた。

二二八研討会は、十二月二十八日の午後一時半から、台北大学の法学部で開催された。孫逸仙思想与国家建設国際学術研討会の閉幕式が終るや、おおいそぎでタクシーでかけつけ、どうやら開会式に間にあつた。

会場は大変な盛況で、若い人たちが通路に座りこむありさまで、二五〇部用意した

資料がたちまち無くなったというからには、四百名くらいは参加していたと思われる。

開会のあいさつに立った二二八民間研究小組の陳永興氏は開口一番、閩南語で話した。閩南語とは福建省と台湾で話される中国語である。中国人社会〔華人社会〕の標準語となっている北京語〔台湾では国語、中国大陸では普通語、とよばれる〕との差異は、英語とイタリア語以上ではないか。筆者には、政治学上の固有名詞が時として耳にひっかかる以外は、全くわからない。

陳永興氏は閩南語でひとしきり話したあと、突然北京語にきりかえ、外国人の参加者のために北京語で話すことわって、再度、開会の辞をのべた。台湾では公用語は北京語、日常語は閩南語であるといってよい。人々は、原則として両方の言語のバイリンガーである（外省人については確認していない）。

会場には筆者のほかに、桃山学院大学の松浦玲氏と関西大学の石田浩氏がおり、さらに二・三人の白人がさかんに写真をとっていた。白人の一人は女性で、あとで本人にきいたところ、民進党の英文秘書ということであった。

会議では、報告者は北京語で話したが、会場の参加者からの質問は、半分以上が閩南語で行われた。これらの質問に対する報告者の答えは閩南語で行われることが多く、本省人（それも福建系の本省人）の会議であるという雰囲気は満ち満ちていた。

事前に報告者たちの書いた論文をもらっていたので、会場をとび交う早口の北京語や閩南語のラッシュに、翻弄されつくすまでには至らなかった。しかし、もう少し落ち着いてゆっくりしゃべってくれないかという、外国人としての切実な願いが、最後までつきまとった。それほど会場は熱気に満ちていた。

ここで、二二八事件について説明しなければならない。この事件についての研究は緒についたばかりである。これまで門外漢であった筆者には、事件の概要が説明できるだけである。

二二八事件とは、一九四七年二月二十八日から約二ヶ月間にわたり台湾全土で吹きあれた、国民党勢力を背景とする外省人たちによる、台湾人社会（日本統治下で、台湾人意識が形成されていたことは、今日ひろく認められている）に対するテロルである。

中国は十九世紀中葉以後、列強に蚕食されつづけた。台湾も日清戦争の結果、清朝から日本に割譲されたものである。列強の侵略をはねのけ、列強に奪われた領土を回復することは、中国近代史の最大の課題であった。

連合国〔中国を含む〕に対する日本の敗戦は、台湾の中国への復帰を実現させた。

これは中国近代史の課題の実現であり、中国にとっては歴史的な慶事であったといわねばなるまい。

しかし「中国」への復帰は、「台湾人社会」にとっては誠に苛酷な状況をもたらすことになる。

五〇年にわたる日本統治の結果、一九四五年当時の台湾人社会は、多くの面で当時の日本社会に類似する文明を形成していた。この文明は、もはや中国大陸の文明とは異質のものとなっていたといつてよい。ありていにいえば、当時の台湾人社会は中国大陸の社会よりも、あらゆる面ではるかに「近代化」されていたと思われる（日本語による教育が行われた小学校への就学率が、すでに七割に達していたなどは、その良い例であろう）。

進駐した国民党勢力がこの特異な社会を「中国」に同化させるためには、時間をかける必要があった。場合によっては、自治を許すぐらいでなければ事態はおさまらなかったのではないか。ところが国民党勢力は、台湾人社会から強引に日本色を一掃しようとした。その性急さは、日本語の使用を一年以内で禁止するなどの措置に端的にあらわれている。

外来の国民党勢力と台湾人社会との間には、社会生活の行動様式においても、強い異和感や摩擦が発生した。かくして台湾人社会には、短時日のうちに国民党勢力（外省人）に対する不満が鬱積した。

このような不満は国民党勢力からみれば、祖国「中国」の支配に服さぬ不程の輩のたわ言と、とらえられたであろう。さらにまた、かつては日本に組みして中国に敵対した人間どもが、何をいうかという反感も強く存在したはずである。

かくして外来の国民党勢力と台湾人社会の間には、ぬきさしならぬ憎悪が高まった。

一九四七年二月二十八日に、台北で、民衆に対する警察の発砲事件が発生し死者が出た。これをきっかけに、台湾全土では外省人に対する殴打事件が頻発し、一部の地域では反国民党の武装暴動さえ発生した。

このような状況下に、国民党勢力は武装暴動を徹底的に鎮圧するだけでなく、日本統治時代に養成されていた各界の台湾人エリートたちを、暴動との関連を問うことなく連行し惨殺したのである。これらの惨殺が、国民党中央の指令下に組織的に行われたか否かは、目下のところ不明である。二ヶ月にわたるテロルの結果、死者は二万人に達し、現在に至るも行方不明者が数多い。

発生以来、この事件に触れることはタブーとされてきた。しかし民進党に代表され

る本省人の勢力が台頭した結果、二二八事件の真相究明要求が高まり、一九九〇年には総統の李登輝が、事件で殺害された人々の遺族と会見した。このあと政府部内には、二二八事件の実態を調査するための機関も設置された。

以上のような状況を背景に、今回の二二八学術研討会が、公開の研究会としてはじめて開催されたのである。今回の会議では黄英哲氏の論文を含む十二篇の論文が発表され、さまざまな角度から二二八事件に焦点があてられた。しかし政府側が二二八事件にかんする檔案〔公文書〕を公開していないこともあり、全貌を明らかにするまでには至らなかった。会議の様態と発表された論文の要旨は、新聞紙上で詳しく報道された。

会議二日めの午後、会議と名のつく席ではすぐ眠くなる悪癖のある筆者は、早口の北京語に疲れ、ついうとうとはじめた。台湾まで来てこれではいけないと思い、隣りに座る石田浩氏が台湾の知人から先刻入手した『二二八事件文件輯録』（台湾省文件委員会、一九九一年十一月刊）を読みはじめた。これは政府発行の二二八事件の調査報告書であり、事件で殺害された人々の経歴や生前の写真、さらに事件当時の模様についての家族の口述筆記が収録されている。この資料は政府側の発表であり、事件の背景や性格などについての分析は、一切おこなわれていない。しかし淡淡とした叙述は、第三者である筆者には、かえって迫力がある。

おどろいたことに、殺害された人々の生前の写真は、昔の日本人とそっくりの雰囲気をただよわせているではないか。日本の司法試験に合格し、日本統治終了後も法務にたずさわっていた裁判官たちでさえ、わけのわからぬまにつれ去られ、惨殺死体で発見されている。こんな記載の連続である。いっぺんに眠気がふきとび、台湾人社会に鬱積する二二八事件に対する恨みが一気に理解できた。肅然とした気持ちで姿勢をただし、壇上の報告者を見つめた。

現在、国民党側の事件に対する公式見解は、「不幸な悲劇であった」、というものである。これに対して告発する側は、国民党に事件発生 の責任を認めさせ、その非を承認させようとしている。

二二八事件の真相解明をめぐるせめぎあいは、多様化しつつある台湾の政治と社会がなおも抱えている根源的な対立を、象徴的に示している。